

第9分科会 社会形成能力

研究課題：社会形成能力を育む教育の推進

地域に貢献し、地域の未来を創る児童の育成

～コミュニティ・スクールの取組を通して～

提案者 廿日市市立津田小学校長 小林 伸二

1 はじめに

大竹市・廿日市の20の小学校はそれぞれ地域連携を密にし、様々な教育活動を推進している。昨年度から二市校長会の教育課程委員会では「社会に貢献する資質・能力・態度を育む教育の創造」を主題に研究を進め、特に「地域とつながる教育活動」に重点を置き、コミュニティ・スクールの効果的な運用についての視点も加えて研究を進めてきた。廿日市市は令和3年度から段階的にコミュニティ・スクールを導入し、令和5年度には市内全小中学校で実施、大竹市も令和7年度から全学校にコミュニティ・スクールが導入され、その機能を生かした様々な取組が実践されている。

2 研究の概要

(1) 二市校長会での取組

月に1回、行われる二市校長会教育課程委員会において特に「社会の発展に貢献する資質・能力・態度を育む教育活動の推進」「地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育の推進」を視点として定め、講師を招くなどして研究を進めてきた。

① 地域連携・地域貢献の情報共有

教育課程委員会に所属する10校の校長が、各校の地域連携や地域貢献を意識した教育活動の実践を交流し、その成果と課題について協議した。またコミュニティ・スクールの先進的な取

組を行っている学校からはその具体についての報告を行ってきた。

② 学校・地域連携カリキュラムの作成

コミュニティ・スクールの機能を生かし、児童の社会形成能力育成を目指した、学校・地域連携カリキュラムの作成を行い、各校が持ち寄り、自校の取組の参考としている。持続可能で充実した学校と地域の連携に繋がり、児童の学びの場の広がりには繋がっている。

(2) 廿日市市立津田小学校の取組

こうした取組の中で、廿日市市立津田小学校の取組を報告する。津田小学校は廿日市の北西部に位置し、令和4年度からコミュニティ・スクールを導入、令和7年度には4年目を迎えている。全校児童60余名の小規模ながら創立150余年の歴史を誇る小学校である。地域との繋がりも密であり、地域行事には多くの児童が参加している。また、書写や家庭科等の授業支援、校外学習や登下校の見守り等、校内外においても様々な支援を地域の方から頂いている。

① 学校運営協議会委員の人選

当初は、前年度までの学校関係者外部評価委員会の方々をそのまま学校運営協議会委員に推薦した8名で構成し、2年間その体制で進めてきたが、委員の高齢化や地域性の偏り、制度導入以前と差異が見られない状況等の課題が散見された。令和6年度は委員の入れ替えを行い、10名の新体制でスタートした。中には30～40

代の方も新たに加えたが、最も意識したのは地域性である。本校は平成28年度に隣接する浅原小学校と統合したが、令和5年度までは8名の委員中、浅原地区在住の方は1名のみであった。そこで、PTA代表の2名を除く8名の内、3名が浅原地区の委員、5名が津田地区の委員と地域性を意識した構成とした。

② 具体的な取組

ア 浅原野外活動

令和6年度、平成27年度を最後に、本校に統合された旧浅原小学校跡地や隣接する市民センター等の施設を活用して5年生の野外活動を実施した。これは学校運営協議会で協議し、地域の皆さんと共に、企画・立案・運営し、実現した。キャンプファイヤーでは、児童12名だけではなく、兄弟姉妹関係、保護者、地域の住民等も集い、100名を超える人で盛り上がりを見せた。小瀬川での川遊びでも児童の安全確保のために約40名もの地域の方が見守ってくださり、安心して活動を進めることができた。2日間、地域の熱い思いを強く感じることができた。

イ 津田商店街まるごとアートミュージアム

校区に所在する津田商店街の活性化に向けての取組である。学校運営協議会で話し合い、「津田商店街を創る会」や「佐伯商工会」とも連携し、進めたものである。児童の絵画等の作品を各店舗に展示し、来店するお客さんの目を楽しませると共に、店舗の雰囲気をも明るく楽しいものにするをねらいとしている。児童の絵をめあてに来店する人も散見され、児童や保護者も商店街での買い物が増えたとも聞いている。新聞社の取材もあり、地域の活性化に一役買っていると考えている。

ウ サンフラワープロジェクト

本校から徒歩5分程度の休耕田を活用して、学校運営協議会委員の所属する佐伯商工会青年部が令和4年度から始めた「津田のひまわり畑」は、地区内外から一定の反響を呼び、多くの見

学者が津田の町を訪れた。しかし令和5年度は発芽せず、その原因も不明であった。翌年、佐伯商工会青年部と協力し、町の新しい人気スポットの復活を狙い、全校児童と保護者も種まきに参加することを決め、実施した。新聞社やテレビ局の取材も受け、町の活性化に寄与できた。しかし、この年も1回目の種まきでは発芽せず、6年生はその原因を自分たちなりに調べ、商工会青年部に向けてプレゼンテーションを行い、令和7年度の事業では、その際アイデアが採用され、更なる盛り上がりにも寄与することができた。

③ 児童の変容

上記の他、様々な取組により、児童の郷土への愛着は確実に深まり、地域の課題を自分たちの課題として、地域の喜びを自分たちの喜びとして考えられるようになってきた。また自分たちからの様々な提案も見られるようになった。

3 校長の役割

津田小学校の「地域貢献」をねらいとした各取組が一定の成果をあげたのは、コミュニティ・スクールの枠組みを活用して、地域との信頼関係を構築できたことが大きな要因だと考える。そのために学校長は地域内外に向けてのよりよい「営業マン」であり「スポークスマン」でもある必要があると考える。また教育課程の見直しについても、教職員への的確な助言指導を行う役割も求められる。これはどの学校にも当てはまることと考える。

4 おわりに

津田小学校のこうした取組は地域からも高く評価された。「児童、学校、地域」の3つの「Well-being」が成立したと言える。今後も二市校長会として、コミュニティ・スクールの効果的な運用を意識し、児童の社会形成能力を高めるような研究を進めていきたい。